

フォトエッセイ#146

函館冬景色のはしり

到着前日の雪が解けて、ポカポカ陽気
と言っても、気温は7℃
美味しい空気が迎えてくれました

ナナカマドの実も熟しきって
いよいよ本格的な冬の訪れの予感
滞在予定は1週間です

2024.12.2~9
島田祥生



母に会ったその足で後輩のコーヒー店へ
棚に並んだ
夫婦で選んだという世界中の名品を眺めながら・・・は
格段にいい味
いや、亭主の腕がいいのです

お客の様子を見て器を選ぶ
と言っていたような
お客の好みには合わせないそうです・・・？

バス停の前の
「イボタ」の垣根（和名：イボタノキ）
小さな黒い実がたくさん

青い実は
細い竹筒で作ったピストルの弾になった
！ 銭店屋でそのピストルが売っていた



→ 土方橋三股期の地蔵 670m
→ 自由市場 120m

函館山
松風町15
40
函館駅



新川町の自由市場で新巻きサケを注文
帰りがけに函館山を眺めた
函館駅から左折してきた市電8101 低床式への改造車
これに乗って柏木町の自宅へ



ハマナスの熟しきった実
函館に真冬がひたひたと・・・
までの一コマです

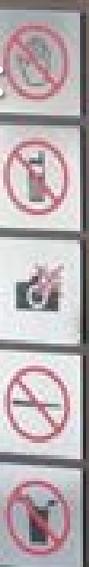


道立函館美術館に出かけてみた 蠣崎波郷と松前藩

蠣崎波郷は
当時のアイヌを描いた卓越した資料
「アイヌ絵」で
数年前朝日新聞に取り上げられたことがある

蝦夷地唯一の藩であった松前藩
その使命は何だったのか・・・

今回は一部を除き撮影可でした



今回の展示は初期のもの
でも半端ではなかった
蝦夷地での画業

これが江戸でだったら…

波響 初期の画業
右のアイヌ絵はインターネットから

絵と詩をこよなく愛した文人・蠣崎波響【明和元(1764)一文政9(1826)、名・廣年、字・世祐】は、松前藩第8代藩主・松前資廣すけひろの5男として福山(松前)城内で生まれた。翌年、松前藩家老・蠣崎廣武ひろぶとの養子となり、江戸の松前藩邸で過ごす。同地では、藩随一の碩学せきがくと称された叔父・松前廣長から武家の子息として必須の学問の手ほどきを受ける。なかでも画才は幼少期より秀でており、その才を見込んだ廣長の手配により、江戸の松前藩邸にも出入りした建部凌岱たけ べいりゆうたいの画譜などから描法を学ぶ。凌岱の没後は清朝由来の南蘋派なんぴんを代表する日本画家・宋紫石そうしせきに師事。装飾性豊かで、克明な写実描写を展開した。



蓮花

畫



畫

畫



虎图
虎图
虎图

蠣崎波響年譜

年号 元禄
西暦 1695

巻九 波響関連事項

天明元 (1764)	1	5月26日、8代藩主・松前資廣の五男として福山城内で生まれる。
明和2 (1765)	2	3月19日、父・資廣死去。6月16日、家老・蠣崎将監廣當の嗣子となる。
明和8 (1771)	8	城内の馬場で馬術の練習を見て、その様子を描き、大人を驚かしたという。 この頃から、廣長より教育を受ける。
安永2 (1773)	10	5月8日、江戸に滞在した建部凌侍(専集斎)より画を学んだか。
安永3 (1774)	11	3月18日、建部凌侍没。
安永7 (1778)	15	この年、宋紫石に師事したか。
天明元 (1781)	18	家老職見習となる。
天明3 (1783)	20	修学を終え、松前へ帰郷。大原左金吾(呑齋)、松前に至り、波響宅に滞在。
天明6 (1786)	23	3月11日、宋紫石没。6月、呑齋とともに大坂の木村葦葎堂宅を初訪問。
寛政元 (1789)	26	クナシリ・メナシの蜂起。
寛政2 (1790)	27	《夷酋列傳》12図を完成させる。
寛政3 (1791)	28	《夷酋列傳》を携えて上洛。呑齋、高山彦九郎、皆川淇園らと交遊。 7月11日、光格天皇の天覧を受ける。
寛政4 (1792)	29	この年、波響は病気にかかり、翌年まで床に臥せる。
寛政5 (1793)	30	この頃より、「波響」の号を用いるか。(出品番号3《花鳥図》参照)
寛政6 (1794)	31	7月、道廣の命で藩の正使として上洛し、呑齋を藩に招聘。呑齋は年限1年の条件で応じる。 15日、呑齋宅・月見宮。菅茶山と初めて会う。
寛政7 (1795)	32	8月13日、円山酒亭華洛庵・廣年の松前別離の宴。茶山、呑齋、淇園、六如、維明上人を招き、 5月下旬、呑齋、京都発。7月21日、松前に到着。
寛政8 (1796)	33	淇園が京都で開いた新書画展覧に花鳥図出品。呑齋、「地北寓談」著す。
寛政9 (1797)	34	息子・波響生まれる。
文化元 (1804)	41	7月初め、江戸の柴野栗山宅で菅茶山と再会。
文化4 (1807)	44	この年、家老となるか。 4月、幕府は蝦夷全島を直轄。陸奥国伊達郡梁川などを与えて九千石とする。
文化5 (1808)	45	4月中旬、松前を発ち、梁川に向かう。
文化6 (1809)	46	この頃、熊坂適山を弟子とするか。
文化4 (1821)	58	12月7日、幕府、東西蝦夷地を松前氏に還す決定を、藩主章廣に申し渡す。
文化5 (1822)	59	1月、複領の件、梁川の波響らに伝えられ、波響および松前内蔵を複領事務責任者とする。 4月13日、波響ら、松前奉行より福山城および領地の引き渡しを受ける。 梁川を去るにあたり、天神社に灯籠一基を寄進する。
文化6 (1823)	60	家督を息子・波響に譲る。
文化7 (1824)	61	9月3日、松前を免ち津軽三厩に至る。この東上は藩主章廣の命により、複領に際し、恩を蒙る諸侯等への挨拶のためだったという。
文化8 (1825)	62	2月、江戸に滞在。波響を通じて画を常州の大島槐菴に贈る。
文化9 (1826)	63	11月、松前に新築した梅複陣取邸舎に移る。 6月22日没。

松前藩による北方図作製

正保元(1644)年、江戸幕府は各地の大名に対して国絵図(各藩の統治する区域ごとの地図)の作製を命じる「国絵図編纂事業」を実施した。これが北海道内部まで及んだ最初の全国規模の測量調査であり、松前藩による本格的な地図編纂プロジェクトとなった。しかし、成果物は北海道や樺太地区が極端に小さく描かれ、現実とはほど遠いものとなった(『桑子の絵図』など)。寛政期に入ってから地理調査は継続的に実施され、寛政3(1791)年頃、松前藩士・加藤肩吾(別名・寿)は新たな北方図『松前地図』を作製。南北にやや扁平な図ではあるが、松前藩の最新の北方図として重宝され、多くの模本が流出した(『文化改正拾遺日本北地全図(文化)』など)。加藤の『松前地図』は伊能図以前に制作された最も正確な北方図であり、松前藩の測量技術の高さを示すものであった。

伊能忠敬以前の
実地測量によるものとのこと

今のホッカイドウとは違いますが
海岸線だけではなく陸地の奥まで
それを勘案すると、なんと精緻な



松前城下で打たれた名刀

蝦夷地でも刀を作った！！！！

それだけでも驚愕もの

だって

原料は？

作り手は？

道具類は？

無い無い尽くし！

近世の北海道は、常駐の刀鍛冶が不在だったこともあり、現地で打たれた刀剣の作例は極めて少ない。このうち、松前城下で製作されたものに、長大な刀身とシンプルな直刃すくはの刃文をもつ「薙刀 銘 堀井正次」(北海道指定有形文化財)1振、丁子ちようじの実を連想させる半円形に反った刀身をもつ「刀 銘 源直義」(松前町指定有形文化財)2振が知られている。それぞれ、松前藩の剣術指南役・佐藤男破魔おはまが、松前来遊中の近江大津の堀井正次に依頼したもの、松前藩士・高田家と八木橋秀親が三河国の源直義を松前へ招き依頼したもの、である。これらの作刀は北海道の工芸史をたどる上でも重要な作例であり、松前町が誇る刀剣コレクションの一角といえるだろう。

この薙刀
ものすごい迫力でした

松前藩に赴いた刀鍛冶の
気迫を感じました



薙刀 銘 堀井正次

万延2 (1861)

松前町教育委員会蔵
(北知通指定有形文化財)

いわゆる「名刀」と比べるのは如何なものか
無骨（失礼）な中にある種の美しさが
「蝦夷地」を割り引いても
見ごたえがありました



刀 銘 源直義

慶應元（1865）

和歌山県和歌山県立博物館
和歌山県和歌山県立博物館

刀 銘 源直義

慶應元（1865）

和歌山県和歌山県立博物館
和歌山県和歌山県立博物館



前回の9月に65年ぶりに会えた
高校3年時の同級生のお店
80歳を機に始めた週2日、10食のお昼料理

今回のメインディッシュは「クロムツ」の煮つけ
ものすごく美味しかった
話が弾み3時間!!!

この日も暖か
冬景色を探して函館駅へ
でも、まだ「晩秋」ですねえ

JR 函館駅
HAKODATE STATION



突然来ました
横殴りの雪
実家近くの柏木町の電停の時計が・・・

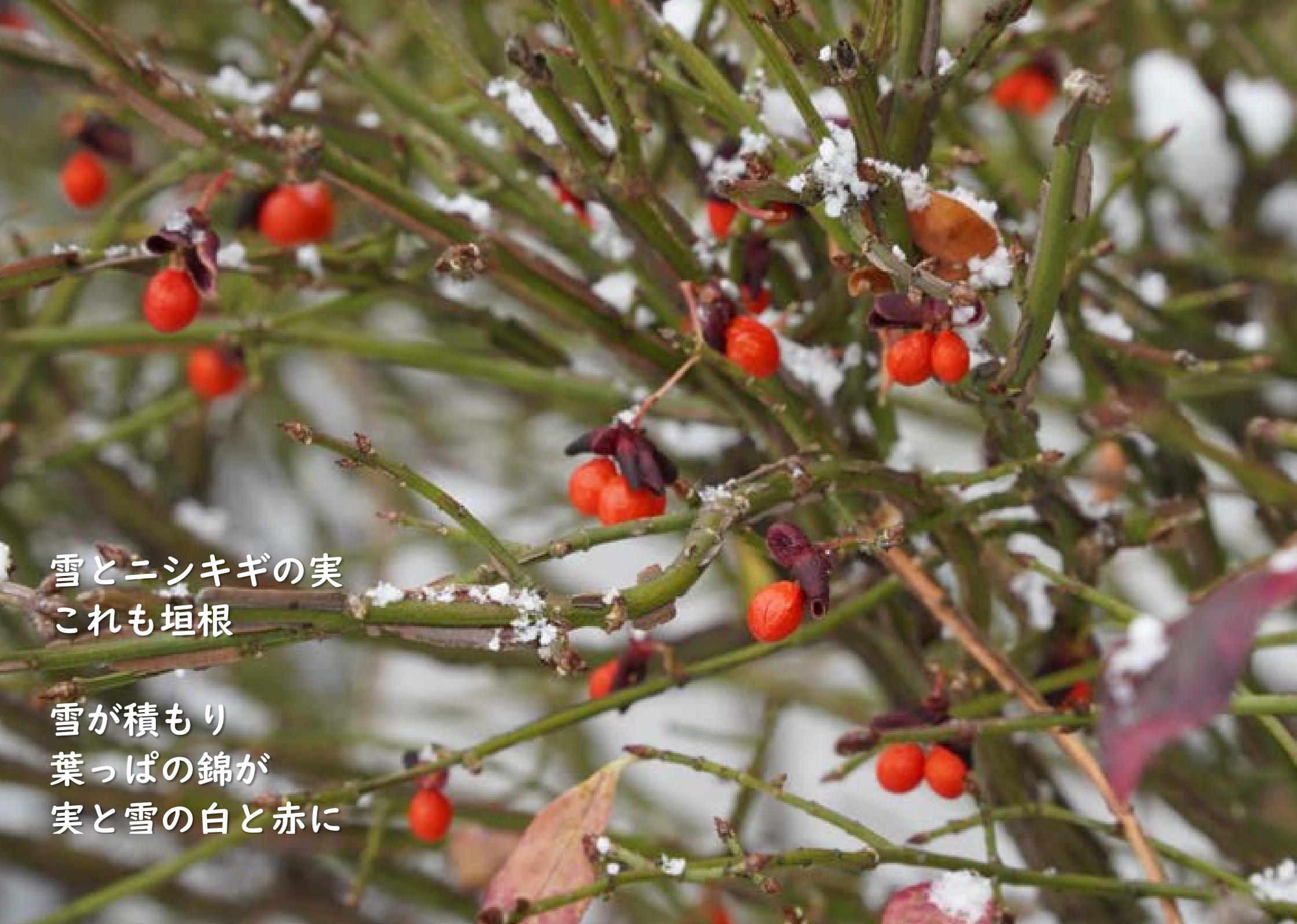
気温は、マイナス1℃
これから電車に乗って
友達に会いに行きます



函館山も
ようやく冬の装い

ここからの函館山を
いつまでも見たいなあ

この川の上流は
我が昆虫採集の格好の場所だった



雪とニシキギの実
これも垣根

雪が積もり
葉っぱの錦が
実と雪の白と赤に

A black crow is standing on a paved road, pecking at the ground. In the background, the rear of a white car is visible, with a yellow license plate that reads '31-25'. The road has white lane markings. To the right of the road is a concrete curb with some dry leaves and a dark vertical post.

どこから見つけてきたのか
カラスが
くるみの実を上空からから落として割っている

かつて秋田（だったか）の映像が流れた
今や、函館のカラスに伝わっている



もう一度落として・・・
手元（口元）がくるって対向車線へ
車が轢いてしまった

「割れた！」
つがいで食べている
車に轢かせて割る
全国に広がりそう



A street scene in winter. A white tram with the number 8010 is moving towards the camera on the right. A dark car is driving away in the middle ground. A tall, modern apartment building is in the background. There are utility poles with power lines and some trees with red leaves. The ground is covered in snow. There are blue directional signs and a speed limit sign (40) on the left side of the road.

何ということのない
近所の普通の景色

そう
電車と
ナナカマドの大きな木の実を
撮りたかっただけなのです

この日は最終日
面会の後
雪道を函館駅へ

晩秋に咲いたバラが
雪の白さと相まって・・・





駅の途中に
土方歳三終焉の地の碑があった

土方は、弁天砲台支援に向かう途中
ここで鉄砲の狙撃に会い落命

中央分離帯のあたりだったと
記録にはある



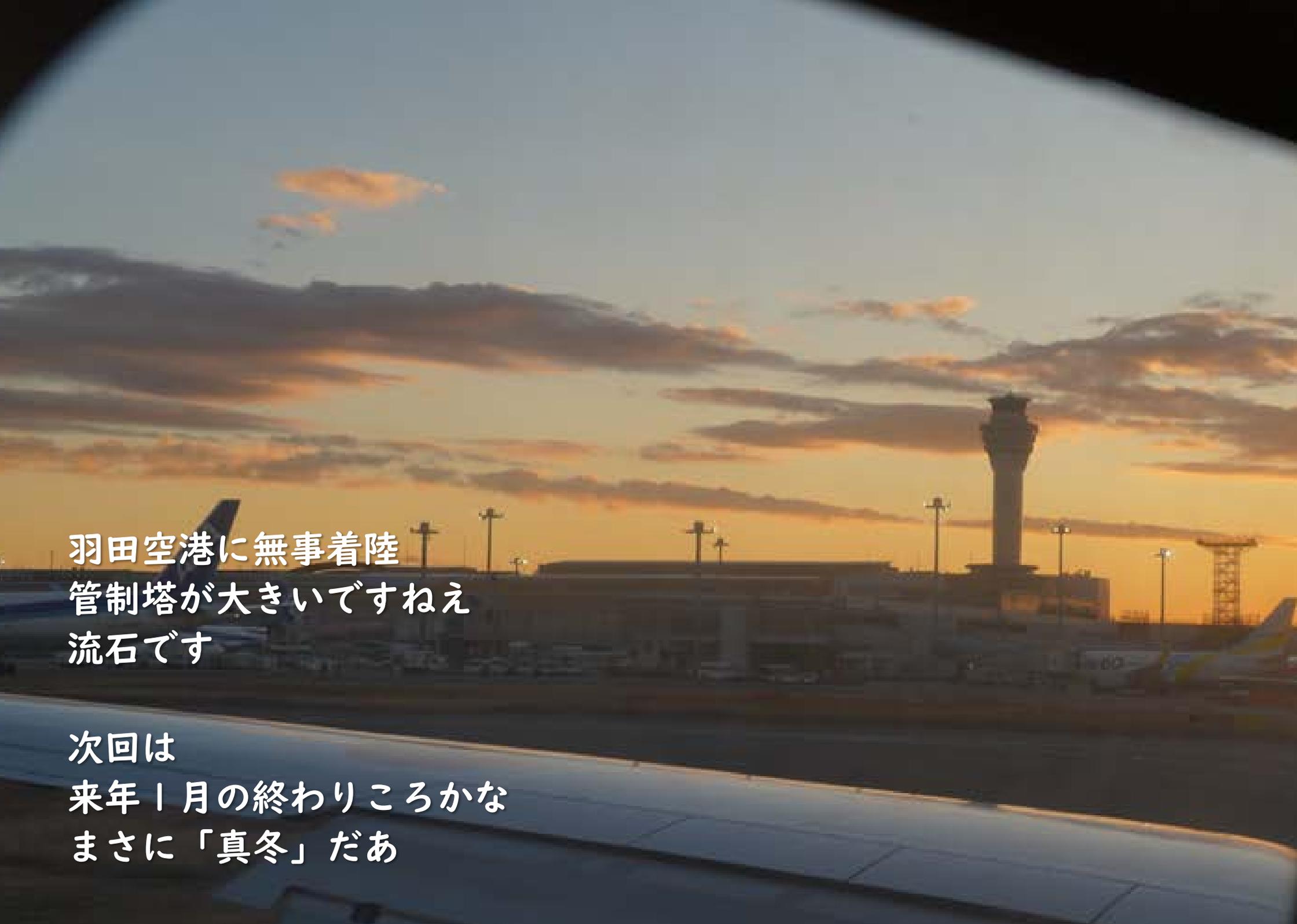
あっという間の1週間だった
魚に堪能
勿論自分で料理しました

作りすぎて
この機の荷物室の我がラゲッジの中に
冷凍されて入っています



羽田に着陸寸前

夕日に映える東京湾
向こうに並行着陸の飛行機が見える



羽田空港に無事着陸
管制塔が大きいですねえ
流石です

次回は
来年1月の終わりころかな
まさに「真冬」だあ